

昭和56年度考古学会総会発表要旨

調査は、台地北側崖部に接した小屋敷氏所有の畑地に設定した6本のトレンチについて行ない、調査面積58m²である。このうち5本のトレンチに遺構が検出され、周辺畑地でのこれまでの遺物出土状況も考慮すれば、台地面にはかなりの遺構が密集している可能性が高い。

検出された遺構は、住居址4（いずれも一部分の検出）、溝状遺構2（あるいは同一遺構か？）ピット多数である。このうち、第1・2次調査溝状遺構とほぼ同時期と思われるものは住居址3軒（1・2・4号住居址）で、他はいずれもいわゆる成川系土器群中の笹貫式時期に該当するものである。これらの点から、第1・2次調査溝状遺構の東側に同時期の集落が形成されていたことが予想される。また、3軒の住居址は方形の形状を示し、最も広い面積を調査した1号住居址ではベッド状遺構を持つことも判明したが、これらは当時の住居形態を知る一資料となるであろう。

遺物は、さほど出土していないが、1号住居址及び溝状遺構内にややまとまりがみられ、1号住居址埋土中からは、松木Ⅰ式甕・山ノ口式甕・須玖系丹塗長頸壺等の土器とともに勾玉状扁平石製品・炭化種子（野桃の種子か？）が、溝状遺構埋土中よりは笹貫式甕・丹塗高坏・須恵器等の土器とともに中央に孔を穿った軽石加工品が出土している。その他、石包丁・砥石各1点が包含層中より、小鉄片1点が3号住居址埋土中より出土した。

《グラビア説明》

（木場遺跡出土縄文時代草創期の土器）

木場遺跡は、始良郡栗野町米永にあり、昭和35年3月、河口貞徳、池水寛治等によって発掘調査が行われた。

この土器は、約1万年前に想定される桜島ベミス直上より出土し、口唇部と、頸部に押圧縄文、胴部以下は回転方向をかえた縄文が施されている。

本県でも古い時期の土器であり完形品になったものでは最も古いものである。関東地方を中心とする縄文文化が、南九州でも早い時期より出土したことは特記すべきことである。